

機関番号：32605

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20700488

研究課題名（和文） 「体ほぐし」の指導に資する心身一体観構築を企図したカリキュラム構成法の開発

研究課題名（英文） Development of the “Karada Hogushi” curriculum

研究代表者

山口 裕貴（YAMAGUCHI YUKI）

桜美林大学・総合科学系・講師

研究者番号：50465811

研究成果の概要（和文）：「体ほぐし」では、学習者に「運動遊び」を楽しませられるよう配慮すべきである。カリキュラム構成の要点は、体を動かすことが即そのまま心地よさ、おもしろさといった心の動きにつながっていく、いわば「心」と「身」は一つの如く密接な関係にあるという感覚を学習者に享受させることにある。よって教員は、授業の「効率性」を度外視し、学習者の心身の活発な働きを誘発するための魅力的な場づくりを考案しなければならない。

研究成果の概要（英文）：In the “Karada Hogushi” curriculum it is important that learners enjoy a session of “exercise play.” The main purpose of the curriculum is to lead learners to realize the intertwined relationship between body and mind thorough pleasure and excitement brought by physical exercise. The teacher needs to devise an attractive atmosphere that allows mental and physical active work of learners even at the expense of “the effectiveness” of the lesson.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：体育科教育・身体思想

1. 研究開始当初の背景

「体ほぐし」は、学習者の誰もが運動することの心地よさやおもしろさを味わいながら、身体運動を介して自己、他者、世界（自然・事物）と対話してみようというねらいを持っている。こうした「体ほぐし」のもつ一定の教育的妥当性は疑う余地のないものだ

が、より仔細にそのねらい（目的論）の教育哲学的背景を注視するといまだ不明瞭である点が多いことに気づかされる。

2. 研究の目的

学習者が自己存在および他者存在を肯定的に自覚しようとする際のキー概念と、その

定義的枠組みの提案を行う。そしてそこから、教員養成プログラムおよび教職FD論の開発の一環として「体ほぐし」のねらいの具体的焦点化とカリキュラム構成法の具体的例示を試みる。

3. 研究の方法

「体ほぐし」のねらいの焦点化とカリキュラム構成法の開発の糸口を案出するため、身体論史や遊戯論史、体育史、教育行政哲学の観点を加味した文献調査を行う。また、東洋思想にみる「気」と「身」の概念を用いて、学習者に心身一体観をもたせるための端緒を見出す。

4. 研究成果

(1) 東洋思想系（主として、湯浅泰雄による「気」の理論および市川浩による「身」の概念）の文献調査によって、教員が、学習指導要領にある「心と体を一体としてとらえ」という文言の真意を認識し、「体ほぐし」のカリキュラム構成を行ううえで必須となる「心身一体」の概念理解を促す哲学的分析を行った。

湯浅の身体論にみる心身一如観においては、東洋の伝統的思想にみる「気」の存在とその役割を重視し、「気」の効力こそが心身一如を基底的に可能にすると捉えられていることを確認した。さらにはこの「気」を、教育学的立場から「コミュニケーション能力の育成」という観点によって探究することや、それをわれわれが実感し深く内省することの意義をも同時に理解した。

市川の理論分析では、理性的認識の集合体としての「気」（雰囲気）が、学習者個々の内部に、「今はこうすべきだ」「次はこれが必要になるな」といった能動的意思を起こさせ、これが一人ひとりの「身分け」（端的に言えば「自己の言動を周囲の雰囲気に合わせる」こと）、いわゆる、他者理解によって得られる適切な自己理解として波及していく原動力になることを押さえた。

また、アメリカのプラグマティズム（実用主義）にみる体育科のねらいと、東洋的身体論から派生させたそれとの質的相違点を抽出する意図から、アメリカを代表する体育教育学者ダリル・シーデントップの著 *Sport Education: Quality PE Through Positive Sport Experiences* を分析し、「プレイ教育としての体育」に代わる「スポーツ教育」という理念の教育学的意味を検討した。

シーデントップのいう「スポーツ教育」は、スポーツそのものを捉える視野をあまりにも狭く設定してしまっており、スポーツは競争（勝敗）の要素以外に「自己目的」な性質を有するもの、という観点を欠落させていることがうかがえた。このことから、アメリ

カ・プラグマティズムにみる体育観は、東洋思想にみる心身一体観の視座に乏しいことが裏付けられた。

(2) 西欧人哲学者・思想家（ベルクソン、メルロ＝ポンティ、クーベルタン、アンリ、リシールなど）による著作文献調査によって、教員が、学習指導要領にある「心と体を一体としてとらえ」という文言の真意を認識し、「体ほぐし」のカリキュラム構成を行ううえで必須となる「身体観」の概念理解を促す哲学的分析を遂行した。

われわれは、何かに積極的に向かおうとするために「意図」を必要とするが、この意図とは、「行為から切り離されては、生まれることも、存続することもできないのであり、常に世界との相互作用として成立する行為から養分を汲み取り続ける」ことを求めている。意図を行為が作り出すのなら、相互作用をより具体化する身体、行為を担う身体が不可欠となる。この視点を体育科教育で取り入れることによって、児童生徒は身体に内在する多くの実践知に目を向け、また新たな実践知を獲得し、それを「身体全体でわかっていくわかり方」として洗練することで自らの体を知的にしていけるのだと考えられる。

こうした身体観に注目した教育は、体力の向上や生涯スポーツの態度育成に関わる体育科のあり方とは質的に異なり、「普通の経験における身体の厚みの痕跡という形で存在する」自己そのものをいま一度捉え直そうとするものである。「体ほぐし」においては、何より、教員生徒ともどもが、私は私の身体のなかにおり、「私とは私の身体である」という根源的観念に立ち返り、体への見方を変え、体の気づきを思想的に考察する必要性を要求するものである。心と体が一体であることを問い返す以上に、思想と体験に基づく裏づけからそれらの関係性を理論的かつ感覚的に自覚することの方がむしろ重要なのではないかと思われる。

(3) 従来の学校体育は、「より速く、より高く、より強く、より上手に」と表現される、いわゆる競争主義や効率主義によって支持されてきた。しかし「体ほぐし」における教育的主眼はこれらと性質を異にしている。それは、「心」と「身（体）」の一体感をテーマにした、いわば「第三の運動価値論」に依拠する学習活動であり、その導入背景には、現代の子どもたちが抱える「関係性」や「身体感覚の問題」が横たわっている。つまり「体ほぐし」においては、「自己」と「他者」、その「関係性」について、「身体性」の観点から把握する「目」を子どもに与えることが必要となるのである。

すなわち、「体ほぐし」においては、児童生徒が、自己と他者の「心」と「身」のありように気づけるかどうか重要な学習点となる。そこで、人が「心」と「身」の両者を相互不可分的であると認識することの仕組みと意義を探る材料として、ホイジンガの歴史的人間観を援用した。

ホイジンガによれば、真面目に遊ぶ子どもたちは、全身全霊で遊びに没入する過程で、「充足感」「仲間との一体感」を味わいつつ、「遊びのもつ意味」の理解を促進させる。子どもは本質的に「遊び」を「ゆとり」であると認識している。自己と他者の良好な「関わり方」、このことに触れる最適の場は「遊び空間」であって、ゆとりのなかでこそ、彼らは「理性」を保ちうる。「理性」に目を向けた児童生徒には、その働きを駆使し、自己と他者の「存在」について考察するだけの素地が出来上がる。「私はどの行為を自分と他人に施すべきなのか」を見つめられるようになった児童生徒を、さらなる深い洞察へと教員は導いていく必要がある。

そのための手立ての一つは「哲学」にあると考えられる。「体ほぐし」はいまだ的確な教育哲学によってその支柱を支えられてはいない。また、「体ほぐし」によって学習者に何を学ばせたいのかという哲学も曖昧なままである。今後は、「体ほぐし」の授業において、どのような構成および方法によって哲学的な要素を取り入れていけるのかを実践的に検討していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

(1) 山口裕貴、サッチャリズム政策に存する根幹的イデオロギーの再検討—ニュー・ライトの思想傾向に関する質的考察—、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」、査読有、第2号、2011、pp. 55-71

(2) 山口裕貴、スポーツ教育の萌芽期にみる社会思想的動向—「体育」から「スポーツ」への概念移行—、体育研究(神奈川体育学会紀要)、査読有、第44号、2011、pp. 1-4

(3) 郡司賀透、山口裕貴、小学校教育と就学前教育の接続を踏まえた保育者志望学生の自然体験の意義理解—幼児教育教員および保育士養成課程における教授ストラテジーの実践—、郡山女子大学紀要、査読有、第46集、2010、pp. 193-202

(4) 山口裕貴、教育的観念としての「効率」と「平等」の問い直し—20世紀末のサッチャ

ー教育改革を例に—、郡山女子大学紀要、査読有、第46集、2010、pp. 203-214

(5) 山口裕貴、ホイジンガ遊戯論にみる「遊ぶ主体」の意味するもの—真面目な身体経験が子どもにもたらす効果—、郡山女子大学紀要、査読有、第46集、2010、pp. 215-222

(6) 山口裕貴、市川浩の「身」の概念にみる教育学的意味—「気」の概念との関係性に注目して—、郡山女子大学紀要、査読有、第45集、2009、pp. 175-186

(7) 山口裕貴、心身一如の視座を基点とした身体教育のあり方—湯浅泰雄による「気」の概念の検討から—、郡山女子大学紀要、査読有、第44集、2008、pp. 205-212

[学会発表] (計5件)

(1) 山口裕貴、教育学的視座における「遊ぶ主体」としての子ども—ホイジンガ遊戯論にみる「真面目さ」の観点から—、関東教育学会第58回研究大会(於:聖徳大学、2010年10月)

(2) 山口裕貴、クーベルタンのオリンピズムにみる教育的意義再考—身体教育の原点を問い直す一助として—、2009年度日仏教育学会(於:東京理大、2009年10月)

(3) 山口裕貴、身体観に注目した教育のあり方に関する一考察—「体ほぐし」の意義への現象学的アプローチ、第52回教育哲学会(於:名古屋大、2009年10月)

(4) 郡司賀透、山口裕貴、保育士養成課程における自然体験の意義理解の深化を目指した教授ストラテジーの実践、全国保育士養成協議会第48回研究大会(於:東北福祉大、2009年9月)

(5) 山口裕貴、シーデントップのPhysical Educationの考え方—プレイ教育論からスポーツ教育論へ—、第52回日本デューイ学会(於:筑波大、2008年10月)

[図書] (計1件)

(1) 岩本俊郎、浪本勝年、山口裕貴、他、北樹出版、現代日本の教育を考える—理念と現実—(改訂版)、2010、128、pp. 102-108

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 裕貴 (YAMAGUCHI YUKI)
桜美林大学・総合科学系・講師
研究者番号: 50465811

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：